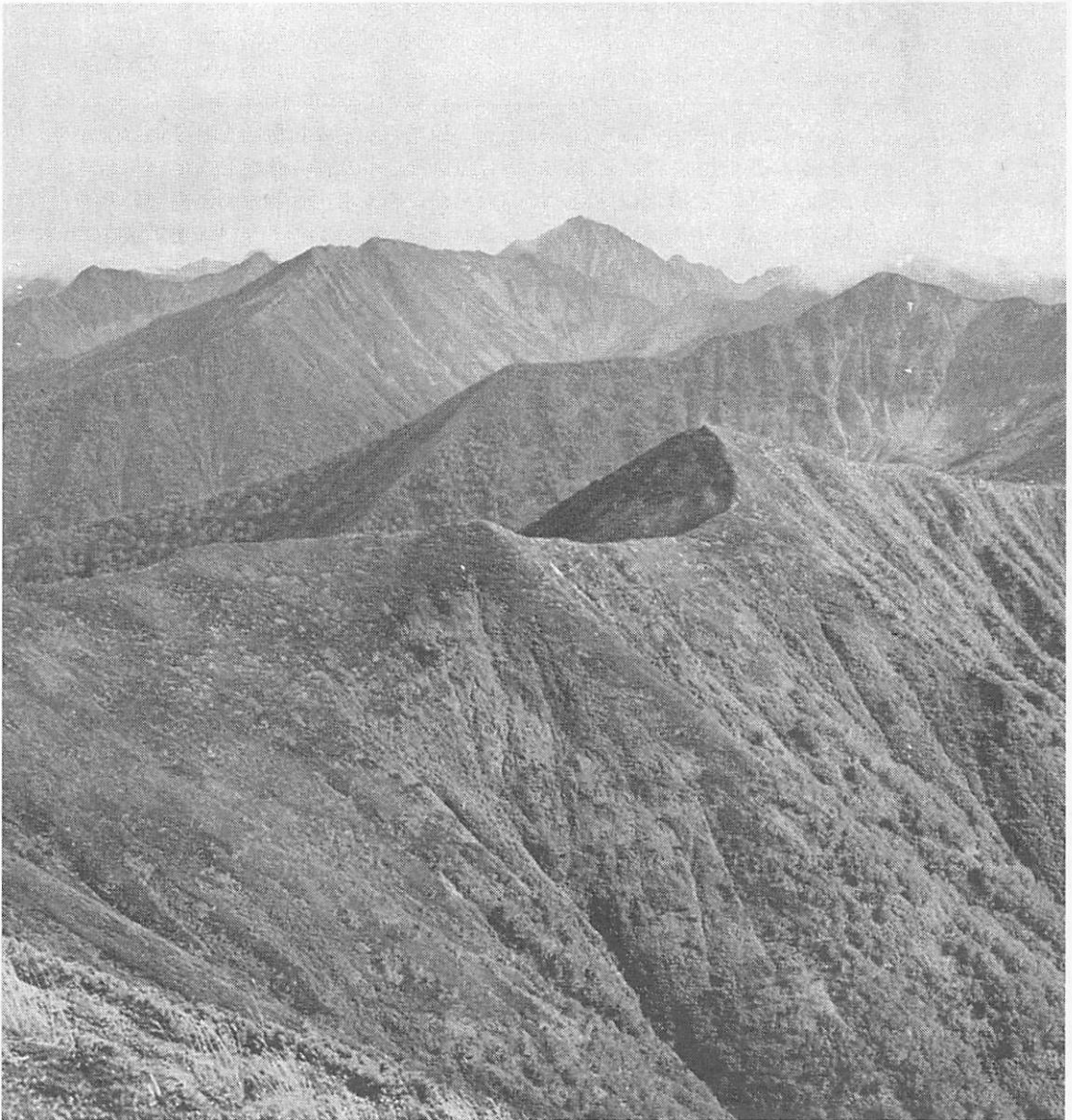


北の自然

北海道自然保護連合通信
No.64 2000.5.20



中部・日高山脈

自然保護団体の活動

真駒内川・わんぱく川遊びクラブ

湯浅 みや

真駒内川は、空沼岳を源として芸術の森・石山緑地・真駒内公園を流れ豊平川に合流します。下流部は人の手が増えられ、上流部は砂防ダムが数基あり土砂供給がされず中流部は岩盤が露呈しています。しかし、真駒内1号橋から上流の芸術の森あたりまでの中流域には自然が多く残されている急流河川です。

真駒内の森の観察会をしているうち、森に沿って流れる真駒内川に出会いました。そして、真駒内川をウェーダーを履いて観察しているうちに、四季折々の森と川の美しい表情を自分たちだけで“ひとりじめ”するのはもったいない、たくさんの子供たちにも知ってもらいたい！と思うようになりました。

近年、都市化などの環境の変化に伴い“川は危険な場所である”という認識の下、子供たちも大人も川から遠ざかってしまいました。そのような現状から、川遊びの経験がある人もない人にも、是非とも川の魅力や素顔を知ってもらいたい、記憶を蘇らせてもらいたい、川で遊んでもらいたい、という素朴な気持ちからこのクラブが始まりました。

「真駒内川わんぱく川遊びクラブ」では、“みんながチビッコサイエンティスト”であり、川の中の魚の棲む世界をみんなでのぞき、魚たちの目線で河畔の林や草

花・虫たちがどんな生活をしているのかを、川に流れ流されながら体感します。そして、子供たちがいろんな生き物たちと出会いともだちになり、みんなで感動・発見・不思議を共有できることを大切に考えています。

大人が目線ではなく、子供の目線で創意工夫しながら年齢の異なる子供たち同志が互いに助けあいながら、危機回避を学んで行けるような、感受性豊かで情緒が安定した次世代の大人に成長してもらいたいと願っています。

真駒内川のそばでうまれそだった、ばばさんから「むかしはもっとおさかながたくさんいた」というおはなしをききました。





ロープをつたって、は
じめて川をわたった
よ。

川の水のなかっ
てツルツルして
るよ。

今年度の活動 スケジュール

川遊びは楽しい！

7月9日(日)

魚とり！水棲昆虫とり！
笹船流して、川の流れ発見！
レスキュー初級編

川で泳ごう！

7月30日(日)

タイヤチューブで川すべり！
川にもぐって、川の世界発見！
レスキュー実践編

サクラマスってどんな魚？

9月10日(日)

夜の魚ウォッチング！
水辺のドングリの木がふえる
といいね、
苗木づくり！

●楽しい問い合わせ／申し込み先

真駒内川 わんぱく川遊びクラブ

堀 由起

貴多本恭子 TEL & FAX 591 - 8060

〈事務局〉ゆあさみや

TEL & FAX 584 - 5501

e-mail: pace@mb.infosnow.ne.jp



ヤナギの木のえだ
で、さかなつり！

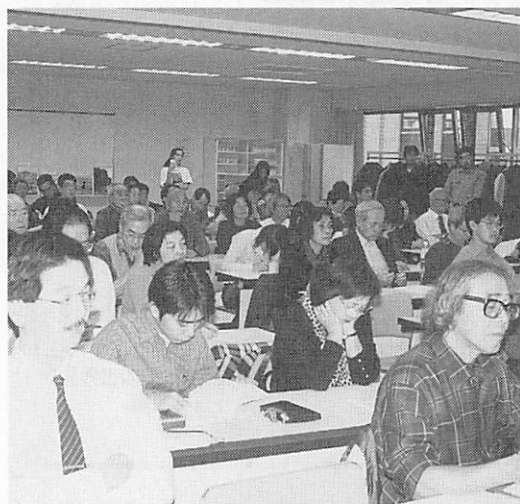
北方四島の自然保護は 北海道の自然保護の原点

—シンポジウムの成果—

北方四島の自然保護を考える会 高畑 滋

経過： 昨年の9月頃、北方四島の返還交渉に先駆けて、千島・サハリン・北海道領域の自然保護を訴えるシンポジウムを札幌で開こうと「北方四島の自然保護を考える会」を有志で結成しました。北海道自然保護協会（HNCS）理事会で話し合ったのがきっかけで計画が進みました。シンポジウムのコンセプトを「この地域の自然を一般市民向けに解説し、開発を考える前に自然をどう守るのかを考える」としました。市民向けに自然を解説するのは経験豊かな専門家でなければ出来ないのので、各分野の研究者を探すことから始めました。幸いWWFから活動助成を頂き、ロシアから鳥学者のジーコフさんの招聘を北海道環境研究センターが計画してくれて充実したシンポジウムを開くことができました。

内容： 自然は生命の誕生以来の歴史をもっていますが、現在の自然に深くかかわりあいのある最終氷期（11—1万年）以降の地史が自然環境の基礎として大事です。幸い花粉分析によって、北方地域の古生態を研究しておられる五十嵐八枝子さんが、シンポジウムの趣旨を理解して「北方四島の地史的生態的意義—北海道とのつながりについて—」という演題で基本的な解説をしてくれることになりました。「北海道の自然史—氷期の森林を旅する—」（小野有五氏と共著、北大図書刊行会1991）で一般読者むけに分かり易く自然史を解説しておられる五十嵐さんは、科学的に北方四島と北海道との関係を示されました。



1999年11月20日シンポジウム参加者

氷河期以降の生物分布の変遷の歴史を受けて、1999年夏に国後島を訪問した植物学の佐藤謙さんが「国後島・爺爺岳の植生」と題して、最新の調査報告をしました。北海道と共通の種が多く約170種の高等植物を確認しました。爺爺岳は1973年に噴火しましたが、自然保護区であるため人工的な植生回復工事はされておらず、全くの自然の状態での植生遷移が観察される場所となっています。

海鳥類の専門家である小城春雄さんからは「沿岸生物保護と漁業の関係」と題して、海鳥保護のためには、流し網や定置網のような漁法を規制する必要があることが示されました。会場で漁網を広げて見せて、海中では霞網と同じ

様に動物からは全く見えないこと、クジラや潜水艦まで掛かってしまう事等を示されました。さらに、和田一雄さんから「鱧脚（きぎやく）類の現状と海洋生物圏保全」というテーマで、人間活動がアザラシ、オットセイ、トド、ラッコなど食物連鎖上位の海獣類の生息を脅かしている様子を、データを基に示されました。北海道で1993年迄の36年間に駆除・罹網したトドの頭数は22,725頭で、捕殺がトド激減の原因であるとしています。トドを絶滅危惧種に指定し、海獣類の回遊ルートであるクリル・アリュート海洋生物圏構想をロシア、アメリカ、日本ですすめる必要を話されました。

サハリンから参加したウラジミール・ジーコフさんは鳥の研究者で、「極東と北海道の渡り鳥とその保護」という題でロシア語で講演され根室市の不破理江さんが通訳しました。この地域の渡り鳥の生態は日本とロシアの研究者の協同によって次第

に解明されるようになっており、北方四島は重要な渡りの中継地となっていることが示されました。パネルディスカッションでは基調報告として、近藤憲久さんが「北方四島自然保護の現状と問題点」と題して、これまでの自然の解説を受けて現状と自然保護上の問題点を提起しました。続いて俵浩三さんをコーディネータとして各講師からの自然保護の提言と会場からの意見・討議がおこなわれました。

北海道との関係：北方四島の自然の現況を聞いて、北海道では失われてしまった豊かで貴重な自然が未だ残っていることが分かりました。しかし、その自然は北海道が辿ってきたような強引な開発によって危機的な状況にあることもはっきりしました。横行する密猟、密漁、密輸、巨大国際資本による海鳥コロニー周辺の石油開発、大規模森林伐採、シアン垂れ流しの金鉱開発など、サハリンと南千島の自然保護の問題点

は、北海道とよく似ています。北方四島の貴重な自然が、北海道と同じやり方で破壊されることに強い危機感を持ちました。北方四島は簡単には行かれない遠い存在ではなく、海鳥や海獣類は国境に関係なく自由に往来しています。この地域の自然を守れないようでは北海道の自然保護は成り立たないでしょう。北海道の身近な自然を守るのと同じ問題意識をもって、ロシアの人達と力を合わせて運動していかなければならないと思いました。

運動の展望：シンポジウムには自然保護関係者や研究者だけでなく、この問題に関心のある一



シンポジウム パネルディスカッション（場所＝かでの2・7）

般市民、学生など大勢の参加者があり、超満員という盛況でした。道内各地は勿論東京からも参加してくれました。参加者から、これだけのテーマを一度に聴けたのは大変有意義であった、各講師の熱意が伝わる充実したシンポジウムであったなど大きな反響がありました。マスコミも大きく取りあげて報道し、科学者達の自然保護についての社会的発言に注目しました。北海道の自然保護団体が中心となって市民に訴え、この地域を守る世論を大きくする運動を展開する必要があると思いました。特に緊急を要するのは、海鳥や海獣類で、環境汚染を最も受け易い生物であり、漁業に因る被害が深刻なので至急対策を立てることが求められています。シンポジウムではこれらのことをアピール文にまとめ各方面に働き掛けることにしています。皆様のご理解とご支援をお願いします。

十勝三股問題

十勝三股「ふれあい自然塾」 は必要か

十勝自然保護協会理事
松田まゆみ

「ふれあい自然塾」とは

大雪山国立公園の南東部に広がる三股盆地は、ニベツ山、石狩岳連邦、ピリベツ岳、西クマネシリ岳等の山々に囲まれた、山岳景観の素晴らしい所です。三股盆地一帯は、かつてはエゾマツやトドマツの原生林が広がっていましたが、今では過度の伐採により、その面影すらない貧相な森林になってしまいました。林業の最盛期には1,000人を越す人々が住んでいた集落も、現在は2世帯7人が住んでいるだけです。集落跡地には、野生化したルピナスが生い茂っているものの、少しずつ自然の姿に戻ろうとしています。

昨年の春、この集落跡地に幅広い廊下のような木道、立派なあずまや、ウッドチップを固めた歩道が出現しました。これが環境庁の手による「ふれあい自然塾」事業のはじまりでした。このあずまやや木道は、自然愛好家だけでなくルピナスを見に来た観光客からも批判的とされました。

十勝自然保護協会は、1998年からこの計画について環境庁に説明を求め、意見を述べてきました。環境庁の説明では、集落跡地を中心とした範囲に約17億円をかけ自然体験ハウス、コテージ、キャンプ場、集い語らいの小屋、エゾシカ観察施設、網の目のような遊歩道、あずまや、園地、観察デッキ等の施設を建設し、環境教育を行うというものです。一枚の地図以外何ら資料も提示されないまま1999年度の工事計画が進められました。

三股の自然

三股の本来の植生は、エゾマツ、トドマツなどの北方針葉樹林ですが、音更川に添ってはヤナギやハンノキ、ハルニレなどからなる河畔林が成立しています。また、集落の北には沢に添って湿地や沼があります。この沢や沼の中には、わが国では3ヶ所しか分布のしられていないカラフトノダイオウ（レッドリスト掲載種）が生育しています。また、沼は多数のトンボの生息地となっており、希少種であるカラフトイトトンボも確認されています。このような北方針葉樹林、河畔林、湿地という環境が重なることにより、多様な生物が生息しているのです。この地域には、環境庁のレッドリストに載っている植物が約10種あるほか、大雪山国立公園の指定植物など保護すべき植物が多数確認されています。

工事をめぐる問題点

1998年に造られた木道の北川入口付近には、エゾナミキソウ（レッドリスト掲載種）の群落がありますが、木道工事によって、この群落の一部が損傷を受けた可能性があります。

1999年度に予定されていた工事は、林道（園路兼管理車道）の整備、歩道、駐車場の建設でした。この工事が当初の予定どおり行われていれば、林道脇の希少な植物が刈り取られる可能性がありました。沼（トンボ池）と林道が接するところでは、人為的原因により沼の水位が上昇し、1998年から沼の水が溢れて林道に流れ



あずまやと木道

ていました。沼に生育していたカラフトノダイオウは、水位の上昇により激減してしまったのです。環境庁は林道に「河床路」を造る予定でしたが、水位を下げずに「河床路」を造れば、カラフトノダイオウの回復は見込めません。また、ウッドチップによる歩道予定地はクロミサンザシ（レッドリスト登載種）の生育地です。

このように、環境庁は希少な生物に対する配慮を全くしないまま工事をしようとしてきたのです。十勝自然保護協会では、環境庁に質問書や意見書を送付して抗議してきました。

検討会の設置

自然保護団体の抗議に当惑した環境庁は1999年度の工事の着工を延期し、1999年12月に学識経験者、地元の住民代表、地元自治体の代表等で構成する「大雪山国立公園十勝三股整備検討会」を設置しました。驚いたことに、ここで初めて「大雪山国立公園十勝三股ふれあい自然塾整備運営基本計画書」（平成11年10月15日付け）が提示されました。

この検討会は、1999年度は12月から3月まで4回開かれました。検討会の話し合いを踏まえた環境庁の結論は、「自然体験ハウス、宿泊施設、歩道は建設したいが、規模等については検討する。1999年度に予定していた工事は凍結する。」というもので、残念ながら、計画を根本的に見直すというものではありませんでした。なお、検討会は4月以降も継続するとのことでした。

三股はどうあるべきか

十勝三股を訪れたことのある人であれば、三股の魅力がその景観のすばらしさや静寂、生物の多様性にあることを分かっていただけだと思います。このような魅力を台無しにしてしまう施設整備はなぜ必要なのでしょう。

環境庁は、三股を自然体験、学習活動の拠点とするために施設が必要であるといいます。地元のひがし大雪博物館や博物館友の会では、三股をフィールドとして自然観察やガイド養成講座、調査活動を行っていますが、特別な施設がなくてもこのような活動を行うのになんら支障がないといっています。

まるで「道の駅」のような自然体験ハウスを造って多くの人々に利用してもらいたいとのことですが、あちこちでオーバーユースの声が聞こえる昨今です。より、自然保護に力を入れるべきではないでしょうか。

環境庁は最近小金持ちになったようで、名称を変えて国立公園のあちこちで施設整備事業を始めました。「環境庁」であればこそ、自然や環境を守るために有効に税金を使ってもらいたいものです。



ウッドチップの遊歩道

十勝三股問題

「ふれあい自然塾」 計画をめぐる環境 庁と十勝自然保護 協会の協議経過

事務局長 佐藤与志松

1995年5月、環境庁自然環境保全審議会は、大雪山国立公園の公園計画見直しの一つとして十勝三股地区を集団施設地区に指定する答申をしました。この指定に向けては、地元上士幌町も働きかけをしてきました。指定を受けて具体化したのが「ふれあい自然塾整備事業」計画です。面積263㌥の集落跡地と林地に施設を配置し、自然体験・学習の場にしようとするものです。

計画の説明にはカヤの外に置かれていた当会は、98年遊歩道が着工されたことを知り、こちらから申し入れし、上川の担当者（公園統括管理官）に説明を受けたり、現地視察を共同でしたり、札幌の事務所に質問書・要望書を提出したりしてきました。

この過程を通じて、環境庁の当会への対応は、庁側が主導で進めるという意思がありありで、資料提示も進んでしたがらない様子でした。しかし、われわれのいくつかの要請に対して、容れることができました。

- 計画全体を決定的なものにしないこと。
- 奥地林地のキャンプ場をはずすこと。
- (99年度計画の) 林道整備にはブルドーザーをいれないこと、トンボ池や遊歩道延長の整備に対しては貴重な植物や昆虫があるから調査した上で、もっと多くの人々の知恵を集めて方策を練り直すまで工事を見合わせることに。

環境庁は工事を見合わせました。地元住民へ

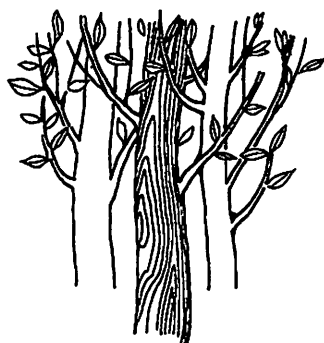
の説明会でも、批判の声が高まる中、行き詰まりを覚えてか、打開策として、昨年12月に検討会なるものを発足させ、計画の再検討をゆだねる一方意見聴取もはじめました（当会の意見陳述は今年2月12日及川裕会長が行う。十勝自然保護協会ニュースNo89掲載）。このことは、環境庁が独自に進めてきたこれまでのやり方を反省して、有識者・地元関係機関、地元住民などに計画の是非を問おうとしたもので、各層の意見を聞く機運が生まれ、とりあえず好ましい方向に動いたものと考えられます。

当会は検討委員に指名されませんでした。今後この会がどのように検討を進めていくのか注目してゆきたいと思います。

【検討委員】

氏名	身分・所属
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学畜産学部教授
辻井 達一	北星学園大学社会福祉学部教授
原田 輝治	北海道自然環境課長
後藤 滋	北海道十勝支庁自然環境課長
西尾 敏幸	上士幌町長
河合 康二	上士幌町教育長
中村 準一	糠平温泉観光協副会長
蟹谷 吉隆	糠平温泉自治会長
田中 康夫	三股幌加自治会長
河田 充	ひがし大雪ガイドセンター

事務局 環境庁職員



着工して16年・日高横断道路

時のモノサシをもとに 新たな視点で日高横断道路の 見直しを

北海道自然保護協会 江部 靖雄

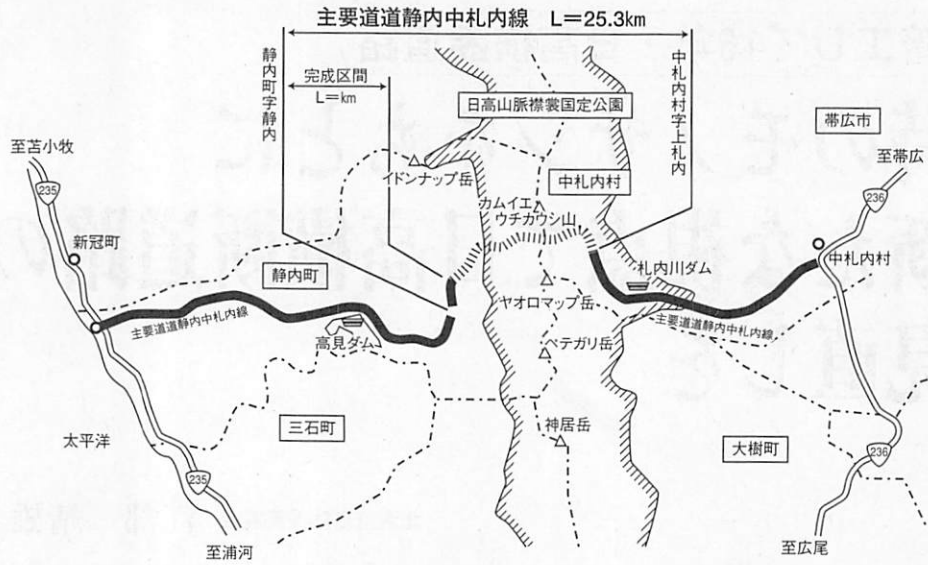


静内側・工事最奥現場、暎光橋（289m）、千石トンネル手前

国の財政赤字は645兆円を超えました。北海道は昨年「財政非常事態宣言」を公表、全ての事業に政策アセス制度導入を決定しました。国、地方共に財政は“火の車”で危機的状態にあります。いったん走り出したら止まらないと言われる大型公共事業計画のあり方がいまその是非が問われています。1960年代から地元関係市町村の強い要望で実現したと言う「日高横断道路」（道々静内中札内線・以下当該道路）計画は当初より「開発か保護」かで世論を二分し、自然破壊は許さないとする地元住民、全道の自

然保護団体、山岳会等多くの市民団体の猛烈な反対にもかかわらずバブルの絶頂期 '84年に強行着工されました。当初の計画でいけばもう完成していい時期であるにもかかわらず着工以来16年経過、進捗率40%にとどまっています。昨年道開発局は建設省の通達に基づき事業採択から10年経過継続中の道路事業に対して当該道路の再評価を行いました。「事業継続」を決定しました。同様に北海道も政策アセスによる再評価の結果「事業の効果」を認め継続を追認しました。然しながら再評価チェック手法、

項目が開発局、道と各々異なりお互いの道路工事区間を評価対象からはずしたり、開発局の再評価では未だ道路工事継続中である北海道の工事区間を既に完成したものと仮定して投資効果の分析をし、もっとも大事な便益（走行時間短縮で得られる利益）を事業費で割った費用便益比は1.7と想定して、投資効果ありとされる1.0の基準を上回った評価をしている。と最近の朝日新聞（3月15日付）は再評価方法そのものが日本の縦割り行政の反映で矛盾と疑問があると指摘しています。当該道路全長101.2km中、国



(道開発局)による直轄開発道路として25.3km、残りの75.9kmを北海道が工事を担当しているが前者の開発道路25.3キロのうち完成区間4キロ(98現在)が北海道に引継いだに過ぎない。

昨年からは静内側はほぼ日高山脈襟裳国定公園の特別保護地区であるカムイエクウチカウシ山とコイカクシュツナイ岳の間の主稜線の地下を貫通する千石トンネル(1,063m)架設工事が、予算向う4年間5億円かけて始まりました。が林道もない掘削工事現場で今年2月7日には落石事故により作業員が死亡した

と報道されましたが、周囲の山々はたえず崩壊の爪跡が残っていますが、険峻な地形と軟弱なもろい地質で、今後も難工事が必至と考えられます。今後千石についてコイボク、福谷各トンネル及び道内最長といわれる全長4.5キロの静中トンネル工事はまだまだ先のこと、調査・設計計画すらたっていないといわれる当該道路計画は日高山脈の主稜核心部分を貫通するいまの時点で再検討をすることが求められます。

不要不急の大型公共工事の典型と言われ、工事費1,000億円以上、人によっては4,000億円要



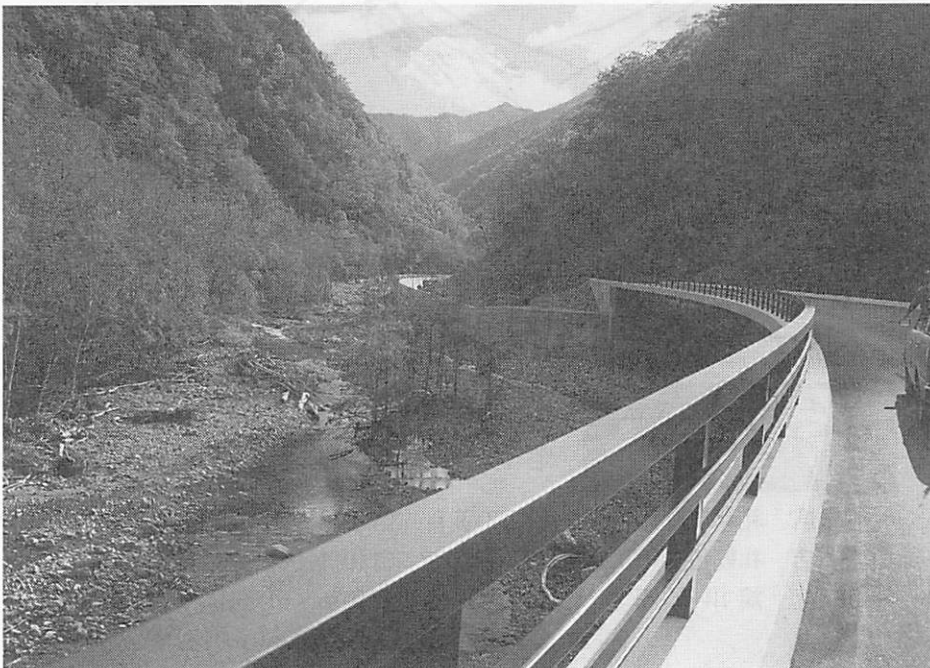
高見ダム上部林道の崩壊所

すと言われています。時のモノサシではかり道路計画の目的、必要性、妥当性を新たな視点で、住民参加、意向調査等々を通して第三者による公平客観的な機関による抜本的な再評価と見直しを求めてゆきたいと思います。



日高横断道路建設経緯

- | | |
|--|---|
| <p>1970～1980年 道内自然保護団体、国立公園協会、日本山岳会、勤労者山岳連盟、W. W. F日本を始め反対の声は全国に広がり、国際自然保護連合の委員会でも取り上げられ、環境庁、道開発庁宛要請文が届けられる等内外の著名人、学者研究者の支援が多く寄せられた。
着工以降も引き続き、工事監視と現地調査、登山を兼ねて、各個別団体は行動を継続、特に道央地区勤労者山岳連盟は毎夏「日高自然セミナー」を開校、登山と現地調査を兼ね地道に現在も続けている。</p> <p>1979. 12 道開発局道路計画北海道に提出、同意</p> <p>1980. 1 道開発局、環境影響評価書公表
3 同上公聴会
9 道と北海道自然保護協会道自然保護団体連合と話しあい
12 日高横断道路を一般「道々」に認定</p> | <p>1981. 10 日高山脈襟裳国定公園に指定</p> <p>1983. 10 道環境影響評価審議会知事宛ゴーサイン答申</p> <p>1984 自然公園法&保安林解除決定最終手続完了
工事着手（延長101.2km、640億円）</p> <p>1994. 4 一般道々から主要道路に昇格</p> <p>1997. 3 開発道路完成区間（25.3km）L≠3km北海道へ引き継ぐ</p> <p>1999. 3 北海道開発局事業採択から10年経過継続中の道路事業に対して「再評価」事業審議委員会の答申を受けて継続決定。北海道も「政策アセス」で事業継続決定追認。</p> <p>2000. 2 北海道自然保護協会一北海道知事及び北海道開発局長宛日高横断道路事業の抜本的な再評価を求める要望書及び質問書提出。</p> <p>2000. 4 十勝自然保護協会 道知事・道開発局長へ要望書提出。</p> |
|--|---|



中札内側・札内川7の沢出合の橋

●編集後記

● 昨年の3月に土幌高原道路が道の施策である「時のアセスメント」の最終結論で、着工が中止になりました。この土幌高原道路建設反対の活動最中に、これが決着したら次は日高だね、と話題になっていたのです。

● 日高中央横断道路は16年前の秋に、自然保護団体や多くの全国の市民が反対する中で強行着工されたのを思い出します。バブル経済真っ盛りで、我が国の自然保護活動がバブルに押しつぶされようとしていたのです。

● 2月3日、北海道自然保護協会は、北海道知事に日高横断道路（道道静内中札内線）事業の抜本的な再評価を求める要望・質問書を提出しました。そして、4月13日に十勝自然保護協会が同様の要望書を道知事に提出しました。

● 日高山脈は大雪山や知床のように知られていません。工事進捗率は40%と発表されていますが、道路の起点になる十勝の中札内と日高側

の静内まで片道一車線の自動車道路にするには全体の3分の1の完成度と、私は考えています。16年×2=これから32年後の完成では何の為の・誰の為の道路なのか、考えざるを得ません。
事務局 小山 健二

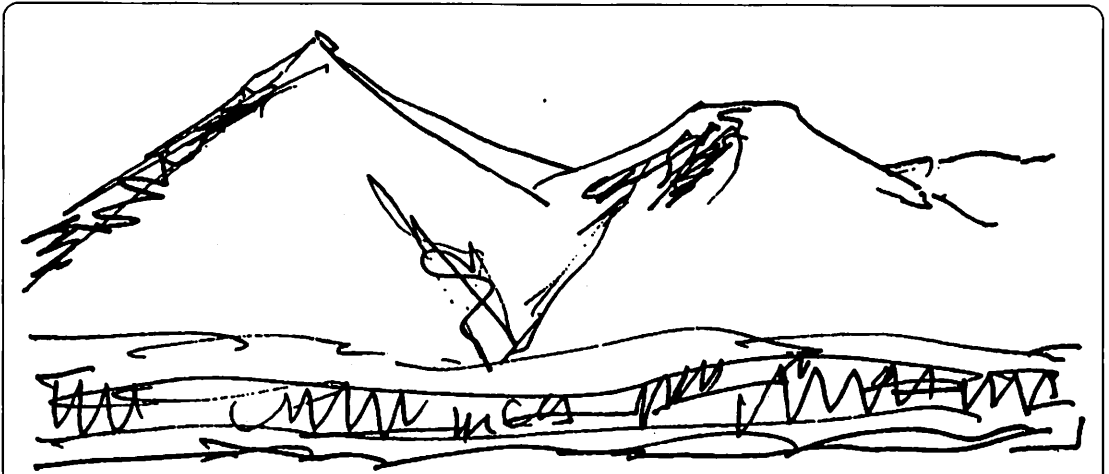
●表紙写真

中部日高山脈
門馬 光徳

北の自然 No.64

2000年5月20日発行

発行 北海道自然保護連合
事務局 札幌市南区川沿10条3丁目12-2
小山 健二様方
TEL・FAX 011-572-2069
発行人 稲田 孝治
印刷 (株)北海道機関紙印刷所
賛助会費 年間3,000円
郵便振替 02710-5-4071



秀岳荘

営業時間/A.M. 10:00~P.M. 7:00
定休日/毎週月曜日

札幌本店 札幌市北区北12条西3丁目 ☎(011)726-1235

白石店 札幌市白石区本通り1丁目南 ☎(011)860-1111

旭川店 旭川市忠和5条4丁目 ☎(0166)61-1930

(専用駐車場完備)